

# 場が生まれ

# 人と出会う

## メタローグな世界への誘い

### 中村先生との対話

#### 北村真也

(アウラ学びの森 代表 / 立命館大学院生)

#### エピソード1 理論は透かしのよう

私には2週間に1度の楽しみがあります。それは、立命館大学産業学部教授、中村正先生とのオフィスアワーの時間です。アウラでのエピソードを書き始めて以来、私たちはこの対話の時間を大切にしてきました。先生との対話は、いつも私の書いたエピソードを媒介にしておこなわれます。アウラという学びの実践共同体で日々繰り広げられる出来事をいくつかの層で記述しながら、より立体的にそれを表現することをめざしてその対話は進行していきます。

「何か、話が抽象的すぎるんですよ。コトバが大きすぎるんですよ。ここでギデンズンの引用なんかしないで、最初から最後までエピソードで通せるかどうかなんです。例えば、このエピソード、これなんかは北村さんの中に既に言いたいことがあって、A子を利用している形になるんですよ。何かそれは理論に合わせて人を斬ってる感じがするので、あまりいい感じがしないんですよ」

「なるほど、このことを言いたいがために、A子を登場させてるってことですね」

「そうそう、現実の方がもっとたくさんあるはずなんです。理論は理論でしかないからね。なんだろうね、“現実には緑で、理論は灰色”って言ったのは、ゲーテなんだけだね、現実をもっと緑なんです。現実をより緑色にするために理論はあるのであって、理論のために現実を持つてくると、理論が灰色化するんですよ」

「そうか、よくわかります。はじめに理論があると、現実がしぼんじっちゃうんですね」

「そうです」

私の中には、論文=理論 という図式がありました。だから、エピソードを常に何かの理論に照らし合わせて書くようになってきたのかもしれない。その理論は、社会学であったり心理学であったり教育学であったり、様々な領域か

ら理論を引っ張り出しながら私はエピソードを説明しようとしてきました。先生の言うように、理論はある一つのフレームだと考えることができます。そこには必ず限定された変数があって、現実には常に理論よりも変数が多いのです。だから、理論を通して現実を見つめると、そこに削り取られるものがあるのです。

「あと、コトバの問題がありましたよね。たとえば“命の大切さ”なんて表現がありますよね。こう言った段階で表現が陳腐になってしまう。こんな手垢がついたようなコトバを小説家の井上ひさしは“のっぺりコトバ”と言っているんです。手掛かりがないんです。誰も反対できない、どうにでも言ってしまうコトバ。無意味化してしまうんです」

「例えば、私の書いた中では、どんなコトバがありますか」

「そうですね。たとえば“生き方”こんなのはコトバが大きすぎるのよ。だからこんなコトバは、使わないようにした方がいい。それを使わないことで、より繊細な現実の記述ができるようになる」

「なるほど、じゃあ、意識してみます」

先生の言う大きなコトバ、それも理論と同じで現実を埋もらせてしまう。ソシユールの言うシニフィエ、共有された意味の中にズレが生じ、そのズレによって現実のデリケートな部分が削り取られていくのかもしれない。

「アウラの森はね、カオスのように何かか層になってあると思うんだ。それを理論や大きなコトバで削り取ってしまうのはもったいない」

「いや、私の中には数学的な思考傾向があると思うんです。現実をあるフレームを通してみるのが好きなんです。

ただ、そのフレームにあまり固執はしないし、いとも簡単にそのフレームをずらすことができる。むしろ、複数のフレームを同時に介在させたり、それを自由に可変することが私の数学的思考形態かもしれない」

「でも、どうしても理論が表に出るんですよね。それが、いかなのです。もっと理論を透かしていく。このことに挑戦してほしい」

「理論を透かすんですか...」

「北村さんは、子どもを観察するプロですから、子どもたちにいろんなものを見てもらうんです。目の輝きや、髪束ね方、しぐさ、声の抑揚...、コトバではない身体知あるいは暗黙知、それを言語化してほしいんです」

「ボランニーの暗黙知ですか、難しいなあ...」

「そういう身体知を北村さんは、学びの活動の中に取り込んでいく。それはただの教室じゃないから、あのアウラの森の空間だからこそできるのかもしれない。ただ単に質問に答えているだけじゃない。北村さんは、他の先生とは違って、それが見抜けている。そこを書いてほしい」

先生との対話は、このように一見すると抽象的な議論が展開されています。しかし私にとって、あるいは先生にとって、それは極めて具体的なのです。ここでは、議論の対象となっているエピソードは単なる媒介にしかすぎません。それを媒介としながら、私と先生の今が出会っていく。そこに生まれてくるものは、決して予定調和の中にあるものではなく、この瞬間に生まれてくるものなのです。そしてそれが、議論の進行とともにどんどん変化していき、それに伴って私自身や先生自身も変容していくのかもしれない。

## エピソード2 視界の中に理論を入れる

「前回、先生が言われたことを、私はポスター

セッションで“理論そのものを視点の中に埋め込

んでいくことで、理論に切り取られない現実の世界を記述すること”って表現したんですけど、そういうことでしょ？」

「そうやね」

「でも、まだピンとこないんですけど...」

「まあそういうことなんだけど、私は 視点 というより、視界 なんだけど、“視界の中に...”」

“視界の中に理論を入れる”ってどういうことなんですか？」

「私は 視界 というコトバが好きでよく使ってますが...、パースペクティブ に近いかな...、

視野 という少し違う。視野 は見えている世界ですからね。見えないものが見えてくるわけだからね。視界 ...」

先生の提案には、コトバの微妙なニュアンスの違いが含まれています。先生は、それだけコトバを大切に扱われているんだと思います。その微かなニュアンスの違いに、先生のこだわりや意図を読み解いていく。これが私に課せられた課題なのかもしれません。

「ところで、エピソードはあれから増えました？」

私は、この2週間に書きためたものを見せました。

「いっぱいあるじゃないですか、なかなかやるじゃないですか」

先生は、そういつて私の書いたものに目を通しました。

「これの ひとりの話 は、おもしろいなあ。ひとりがいいというこれね。これいいですよ。これ “ひとりがいい” ということをもっと深めませんか？ 解釈学的にね...」

「Y子ちゃんの話ね。この子、不思議な子なんですよ」

「その不思議さをもっと書いたらいいじゃないですか」

「Y子ちゃんねえ...」

「その深めがあると、もっとおもしろいなあ。まだわりとありきたりのテーマ性なんですけど...。

兄弟が多いとか、通信制がいいとか、いくつか出てきてるんですが...、“ひとりがいい”とY子は言う。そこに北村さんが“ひとりではあかんと思うけど”と言いながら、“ひとりがいい”と言うY子に興味を持ち始める。そこには、不登校の子どもではない、目の前のあなた、つまりY子がいる。今までY子には、そんな風に関わってきた人がいなかったのかもしれない」

「かもわからん...。何かこんな風に話すのはじめてだって、言っていましたわ」

「何か、あるのかもしれないね。そこには...。そこには、Y子と北村さんとの、私-あなた の関係があるのかもしれない。もし、北村さんがそんな風に話しかけなかったら、Y子はその他大勢のアウラの生徒の一人だったかもしれない...。というあたり、そこがおもしろかった」

先生は、いくつかのエピソードの中から直観的にもおもしろいと感じたものを取り上げ、そこに切り込んでいく。そして、そこから二人の対話は深まっていくのです。

「ひとり.....」

「ってなんでしょうね.....」

「というか、私は、“ひとりでOK”なんて思えない。まだそこまで、いってない気がするんです。ひとりになることは、どこかこわい。先生はそんなことはないですか？」

「私は、大丈夫です」

「本当ですか？たとえば、ひとりで旅に出る。でもそれは、必ず帰るところがあるから、行ける

気がするんです。ずーっと、ひとりで生きるって、なかなか想像できないかもしれない。でもY子は、それができる気がするんです」

「私はひとりが好きですよ。ひとり暮らしも好きです」

「先生は、Y子に似てるかもしれない。先生もまわりから理解されない感覚ってありました？」

「まあ、多少はありましたね。まあでもそれはよくありがちな孤独だと思ってましたけど」

「とにかく不思議な子なんです。毎日決まった時間に来ては、ただ黙々と寡黙に学んでいる。そして帰るときには、毎日、“楽しかったです”と感想を書いて帰るんです……」

「まあ、とにかくこの子は、なんか北村さんのもやもやを開発してくれたんだ。そしてこの子の合わせ鏡の中で、北村さんは何かをリリースしようとしている。この子の鏡に、北村さんとの出会いを通して何か映ったわけでしょ？」

「この子は、今まで学校の先生は嫌いやったというんですよ。今までの先生はよく“あんたはこうやる”って言ってきたけど、それはみんな外れていたそうなんです。でも、説明するのがめんどくさいから“うん”で言ってきたって言うんですよ。それで、そんな先生の関わりと私の関わりは、きっと彼女にとって根本的に違うんだろうと思ってるんです」

「どんな風に違うんだろう？」

「私は、Y子ちゃんに興味があるって、言ってるんです。それは私と違うから、私の持っていないものを持つてる気がするから、だからすごいなって思うんです。ある意味、敬意を持つてるのかもしれない」

「ますます、おもしろいね。これもっと深めましょう。っていっても、議論はしづらいかもしれないね。どう記述するかだよ。これ、北村さんしかできないものね。単に調査しているだけじゃないものね。深い記述…、北村さんは、この子の前に鏡を立てたわけだ。まあもう少し、書いてみてよ」

先生の話を受けて、私はY子の記述を続けることにしました。アウラの記述の切り口はどこでもいいのかもしれない。そこを深く掘り下げていくことで何が見えてくるのか。ひょっとすると、どこを掘り下げてみても、そこに見える世界は同じものであるかもしれない。ただ、今の私に必要なことは、それをどう記述するのか、私の記述のスタイルなのかもしれません。私の視野の中に理論を組み込みながら、これからも私は記述を試みます。そしてこの先生との対話そのものが、私の視野の中にさまざまな理論のフレームを組み込んでいく作業なのかもしれません。

### エピソード3 つながりあうということ

つながりあうって、どういうことなのでしょう？私の中でグルグルと思考が回ります。ひょっとすると、私たちが「つながっている」と思っていることも、そう思い込んでいるだけで、本当はつながっていないのかもしれない。

「北村さんは、大学院に入ってから何か変化があった？」

「そうですね。コトバが増えました。表現できるコトバが増えたように思います」

「そんなの、もともと持ってたじゃないですか、北村さんは、もともと大変ボキャブラリーが多い人ですよ」

「いや、そんなことはないですよ。やはり大学に来てから、堰を切ったかのように本を読み始めましたし、授業を受けるたびに発見があるので、そのたびにコトバが増えました。でも、言われてみれば、大学に入って得たコトバには、すべて状況がついています」

「状況がついてるって？」

「つまりそのコトバを引き出していくと、そのコトバを使った状況やその時に考えたこと、そんな付随する状況がそのコトバと一緒によみがえってくる。だからそこにリアリティがあるのかもしれない」

「なるほど、そうですね...、そのコトバが北村さんのワーキングメモリーに出てくるようになったのかもしれない」

実際、大学院に入ってから私の読書量は、半端なものではありませんでした。私はこの1年の間に100冊以上の本を読み、その他、かなりの論文にも目を通してきました。もちろん仕事をやりながらですから、自分でもかなり驚異的な読書量だったと思います。私は、授業で要求される本があれば、その本とその周辺に位置する本を最低、2,3冊は読みました。授業で先生に質問するためです。私は型通りの(予定調和的な)授業は面白くないと思っていました。どんどん質問しながら、その場で先生がうーんと唸りながら、自分の考えを述べる、その瞬間にその先生との出会いを感じていました。そして、そこまでの質問をするためには、ただ単に本を読むだけでは不十分です。その本に書かれているコトバに、自分自身の経験に関係づけていく必要があります。コトバを単なる記号としてではなく、私固有のシニフィエをそこ

に埋め込んでいく必要があったのです。

「ある講義の最後の授業で、年配の学生の方が問題提起をしたんです。“最近の学生たちを見てみると...”ではじまる内容だったんですけど、いわゆる若者批判ですよ。その問題提起を受けて、先生が学生たちに意見を求める。すると彼らは、素直にそれを認める...。私は、そのやり取りを聞いていてどこか違和感を感じたんです」

「どんな違和感？」

「その年配の方の意見の根底には、若い学生たちを自分とは違う他者としてみる認識がある。つまりその方と若者は切り離されている。でも、私の中には、少しそれとは違った認識がある。私は、彼らと同じ側面を常に持っているという認識、ここが違うと思ったんです。その理由は実に簡単で、それは私自身が彼らと同じ社会に今生きているということです。私の生活も彼らと同じ選択消費の社会、情報化の社会、個人化に向かう社会の中に埋め込まれているという事実です。だから、私は日々葛藤の中で生きているのかもしれない。私がこの肉体を持っている限り、私の了解を超えてどんどん進んでいく社会の中で生きていかなければならないのであり、現代社会の持つ病理的な側面をも共有しなければならないのです」

「なるほど、そうだね」

「だから私は、こんな風に発言したんです。“私は、みなさんと同じ社会に生きているので、当然みなさんと多くのことを共有していると思います。私が、その中で最も気にかけていること、それはつながりということです。選択消費、情報化、個人化が末端まで普及した現代社会では、私は気を許すとバラバラになってしまうという緊張感があります。たとえばこの授業で、私たちは現代社会における家族について学んできました。そのいくつかの論点について問題提起をしてきました。

でも、授業が終わると自分が問題提起をしたにもかかわらず、その問題とされる生活の中に平気で埋没していく。ここには、授業の中の自分と日常の中の自分との間の分断がある。このことに対して私たちはもっともっと自覚的にならないといけないと思う。私たちの生活は、分断されたバラバラのものがただ集まっているのではない。一つのもものが変われば、全体が変わっていく、その有機的なつながりを意識して構築していかなければならないんだ”と、こんな風に話したんなんです。すると、授業が終わった時に、何人かの学生たちがやってきて、もっと話を聞かせてほしいと言ってきたんです。それで彼ら5人が、今度アウラにやってくることになりました」

「へー、楽しんでみたいだね。彼らは他学部の院生？」

「そうなんです。たまたま授業が一緒になっただけなんです…」

「北村さんのコトバに彼らは出会ったんだよ。つながったわけだ」

私にとっての学びとは、つながりあうことかもしれません。それまで、バラバラだったことが、あるまとまりを持ち始める。するとそこにある意味が生じてくる。つまり学びとは、未知の情報と自分自身との出会い、もっと正確に表現すると、自分の現在の生活や過去の経験とつながりを持った既有知識が未知の情報と統合されていくプロセスと言えるかもしれません。そして、この学びは他者との深い出会いや対話の中で、さらに輝きを増していきます。それは、他者との既有知識との出会いを意味することであり、そこには分断のできない他者そのものとの出

会いがあるからです。

「私の中では、切り離されていない感覚がある。私は、一人、たった一つなんです。こうして先生と話している私も、授業で質問をする私も、生徒の前の私も、家族に接する私も、みんな一つの私。だから、そのどこかで私自身が変われば、全体が変わっていく。私にとって他者との出会いは、その他者全体とつながること、もちろん他者のすべてに関わることなんかできません。あることを通して関わるのですが、そこでの深いかわりが大切になってきます。たとえば、先生との対話、これにはかなりの深さがあります。だから私の深い部分での変容が起こり、それは同時に先生の深い変容を促しているように思います。こんな出会いが起こると、この会話を共有しながら双方に深いつながりができる」

「それが北村さんの言う社会連帯なんですね」

「そう思います。形だけの連帯ではなく、本当に人と人が出会っていく。この瞬間に一つになれることかもしれません」

つながりあうということ。これは現代社会において最も大切なことかもしれません。そしてこのことは、単に人間同士の関係性にとどまらず、個人の学びにおいても同じ課題を残しています。現代社会が結果的に、このつながりあいを分断する傾向を持ってしまっている限り、私たちはその現状に対して自覚的であるべきであり、意識的にそれを統合していかなければ、本当の意味でつながりあうことはできないのではないかと思うのです。